

2019. 3. 25

No.212

編集・発行人 樋口みな子

E-mail

minginga@agate.plala.or.jp

URL <http://www13.plala.or.jp/minginga/>

郵便振替「銀河通信」

02740-7-56535

(郵送年間1,500円)



## 原発のない安心な未来をつくる候補に投票を！



3月16日春の風物詩、壮観なマガンの群れ（安平町で）

3月15日、ニュージーランドのクライストチャーチで起きたテロ事件に、信じられないほど衝撃を受けました。事件が起きたのはイスラム教礼拝所の礼拝のさなかでした。死者50人、けが人50人と何の罪もない人が犠牲になったことに悲しみと怒りを覚えました。

私は家族で1997年にニュージーランドを旅しました。自然が豊かで、暮らす人々の温かさに満たされ、あんなに楽しかった旅はありませんでした。人口約400万人に対して羊は15倍もいるそうです。当時の銀河通信(83号)には「第一印象は質素で心温かな人たちが住む国でした。息子にクライストチャーチで買った帽子が地元のラグビーチームのものでした。『クルセーダーズ、オー、ナイス、ボーイ』と気軽に声をかけてくれ、息子も大喜びでそのたびに『サンキュー!』と。原発のないクリーンな国であり、85年に核兵器搭載可能な米艦船のNZ寄港を拒否したことで有名です。また女性の参政権を認めたのも世界初」と書きました。もう一度「家族でニュージーランドに行きたいね」と話題にし、親しみを感じてきた国です。犯人は過激な白人至上主義者の28歳のオーストラリア人です。容疑者は2011年7月に起きたノルウェーのウトヤ島などで77人が殺害されたテロに大きな影響を受けたと語っています。

日本も例外ではないと思います。在日に対す -1-

るヘイトスピーチに始まり、外国人実習生への低賃金、過重労働に怒り、労組を通して訴える事態にまでなっています。子どもへの虐待、言葉の暴力はちまたに溢れていて、殺伐とした社会に、暗たんたる思いでいっぱいです。

沖縄の辺野古新基地への埋め立ての賛否を問う県民投票は、7割の県民が反対と投じたのに、安倍政権は、丁寧な対応をしていきたいと述べていながら土砂の投入を一日たりとも止めていません。

3月17日の琉球新報は沖縄県民投票後、初めて開かれた16日の県民大会の様子を伝えています。引用です。「『日本に民主主義はあるのか』『沖縄は今も捨て石だ』。参加者は口々に訴えた。県民投票実施の原動力となった若い世代も積極的に発言し賛同と共感が広がった。沖縄戦体験者、家族連れ、若者全員が手を携え、そして誓った。国が進める辺野古新基地建設を諦めるまで、「ノー」の意思を示し続ける、と。■会社員の友利麻記子さん(34)＝那覇市＝は若者の発言に拍手を送った。『あと何回、県民大会や選挙で民意を示したら政府は辺野古を諦めるのか。古里を守るために負けれない』。糸満市の高良弥生さん(39)は「率直に言えば、沖縄は国の捨て石。沖縄戦の頃と変わらない』。腕の中で3歳の娘(略)が眠っていた。『この子たちが戦争に巻き込まれたら、と思うと。自分にできることはしたい』と力を込めた。■参加者は立ち上がり一斉にメッセージボードを掲げた。『土砂投入をやめろ』『民意は示された』。さらに両手をつなぎ「ガンバロー」と声を上げた。1度、2度、3度と高く掲げられた手は、春の陽光を浴び、一層の力強さを発していた」。引用終わり。

この記事を読んで私も何かしなければと思いました。沖縄に何度も通って支援している友人がたくさんいます。沖縄に行くことはできませんが、県民のメッセージだけでも読者にお伝えしたいと思いました。

官邸の記者言論弾圧に、3月14日に抗議行動が行われました。「国民の知る権利」を守るジャーナリストの役割をはたせるよう応援したいと思います。

## 『週刊金曜日』創刊25周年記念札幌講演会 格差と貧困スパイラル～ブラックバイト と奨学金 中京大学教授・大内裕和さん



「最近の若者は政治に関心がない」と嘆く声はよく耳にする。しかし、ちゃんと「最近の若者」の置かれている状況を理解しているだろうか。



撮影・長谷川綾さん

1月26日、『週刊金曜日』創刊25周年記念札幌講演会が札幌市北区の札幌エルプラザで開かれ、奨学金問題に詳しい中京大学教授の大内裕和さんが登壇した。

また、後半のパネルトークでは札幌学院大学に研究生として通う二本松一将さん、保育士の保坂勇祐さんが、約140人の聴衆を前に自身の体験を語った。

日本学生支援機構の奨学金には無利子（第一種）と有利子（第二種）がある。二本松さんの場合、学部1年目は有利子の月12万円、学部2年目からは有利子の月8万円と、無利子の月6.4万円を借りている。合計返済額は725.4万円に上り、月3万円返し続けるとして、約20年かかる計算になる。昨年10月に計510万円を完済した保坂さんは、「もし自分や家族の身に何かあったら生活が成り立たない」という不安を常に抱えていたという。

大内さんは、ある講演会で60代の男性に「そんなに奨学金を借りるくらいなら、学費の安い国立大学に行けばいいのでは？」と質問されたという。しかし、「国立大学は学費が安い」という感覚は時代遅れだ。国立大学の授業料標準額は1969年入学の場合、1万2000円だったのに対し、2010年入学の場合、53万5800円である。私立大学と国立大学の授業料の差は平均1.6倍にまで縮まっている。また、「無理して大学に行くくらいなら、高卒で就職すればいいのでは？」と聞かれることも多いという。しかし、1992年に167万6000件あった新規高卒者に対する求人数は、2010年には19万8000件にまで減少している。お金がなくても就職のためには大学に行かざるを得ない状況がある。

1998年に23.9%だった大学生の奨学金利用者は、1990年代半ば以降急激に増加し、2010年には50%を超えた。その決定的な原因となったのは親の所得低下である。世帯年収の中央値は1998年の544万円から2009年の438万円にまで下がっている。

これは、一人暮らしの学生への仕送り額にも影響した。1995年には62.4%の学生が月10万円以上の仕送りをもらっていたが、2016年には29.2%にまで減っている。一

方、仕送りゼロの学生の割合は1995年の2.0%から2016年には8.0%にまで増えた。

生活費を捻出するため、学生たちはアルバイトに没頭することになる。ここで、問題になるのはブラックバイトだ。大内さんはブラックバイトを「学生であることを尊重しないアルバイト」と定義する。低賃金であるにもかかわらず、従来の正規労働者並みの義務やノルマを課され、学生生活に支障をきたすほどの過酷な労働を強いられる。

「そんなバイトやめればいい」と思うかもしれない。しかし生活がかかっているのだ。やめられるはずがない。企業もそれが分かっているから、学生をこき使う。

こんな状況の中で「政治のことを考える余裕などない」というのが彼らの本音だろう。むしろ、奨学金問題やブラックバイトこそが政治争点化されるべきなのである。

奨学金利用率が上昇する一方、規制緩和によって非正規雇用が常態化しているため、返済はますます困難になっている。結婚しない若者が増えているのは、決して彼らが結婚を望んでいないからではない。できないのだ。ましてや出産など想像もつかない。奨学金は少子化に直結する問題なのである。

「9条より25条」という大内さんの言葉が印象に残った。米国のサンダース、英国のコービンがなぜ若者の絶大な支持を集めているのか。リベラルな価値と結びつけて、構造的な貧困に対する具体的な解決策を打ち出しているからである。政治が若者に関心を持たなければならない。（注「憲法25条は『すべて国民は、健康で文化的な最低限度の生活を営む権利を有する』と定める」）

（北海道大学4年・藤谷和廣）

藤谷さんは、4月から朝日新聞記者として旅立ちます。

### 森友問題とNHK報道 相澤冬樹さんに聞く驚きの真相



「森友学園」（大阪市）への国有地売却をめぐる、スクープ報道した元NHK記者の相澤冬樹さんが2月26日、札幌エル

プラザで講演しました。当日は約300人が会場を埋め、関心の高さを伺わせました。

相澤さんが報じたスクープは2つです。一つ目は2017年7月、財務省近畿財務局は学園側に国有地を売却する際、事前に「いくらまでなら支払えるのか」と聞き、提示額を下回る額で学園側に売却したことを報じました。二つ目は2018年4月、ごみの撤去費の名目で8億円以上も値引きされて国有地が売却された問題で、財務省が学園側に『トラ

ック何千台もごみを運び出したと言ってほしい』と口裏合わせを求めていた」ことをスクープしました。しかし、二つ目の特ダネをなかなか報じませんでした。ニュース7の一番最後で小さく扱われたと話しました。

東京の報道局長から大阪報道部長に電話があり、「あなたの将来はないと思え」と言われたことを明かし、相澤さんは「自分のことだ」と直感したと語りました。

その後、政府に忬度したNHKは相澤さんの報道に不都合を感じ、記者を外す人事を伝えられました。「生涯、記者として生きたい」と31年働いたNHKを退社。

現在は大阪日日新聞の記者として、今も森友問題を追及しています。

真実を伝えたいと奮闘してきた記者魂に、引き込まれました。当日、会場に並べられた著書の「安倍官邸vsNHK」も完売しました。

### 官邸のメディア圧力と日米軍事一体化 東京新聞 杉谷剛さんの報告

東京新聞の杉谷剛社会部長の講演は官邸から質問制限申し入れの文書が出された件から始まりました。



講演する杉谷剛さん＝撮影・往住嘉文さん

望月衣塑子記者の質問に対して9

回にわたって「事実に基づかない質問は慎んでほしい」と申し入れがありました。

「埋め立ての現場では、赤土が広がっている。沖縄防衛局は実態を把握できていない」との望月記者の質問について官邸側は事実誤認としたのです。しかし実際はその通りでした。痛いところを突かれるのが不都合だったとしか思えません。

会見は「国民の知る権利」に応えるための重要な機会です。またメディアは権力を監視する役割があります。官邸が記者の質問を遮ったり規制することは許されません。でもなぜ記者クラブの他の記者は望月さんの援護をしないのかと残念に思いました。もうすでに萎縮がはじまっているのでしょうか？

杉谷さんは、官邸の強硬な姿勢とともに、改憲に向けて軍拡競争が始まっているとして、たくさんの事実を紹介しました。

アメリカから高い戦闘機を買っていること。そこに補正予算をつぎ込んでいると。安倍政権になってから軍事費が急増していると述べました。

資料は100部しか用意してなく、3度にわたって印刷の追加をしました。政府のメディアへの露骨な介入に、たくさんの人が関心を持っています。憲法21条に「表現の自由」が明記されています。「知る権利」がなければ「表現の自由」も保障されないのだと思いました。

受付だったため、少し聞き逃しがあります。軍事費の中身については東京新聞で「税を追う」という連載で詳しく報じられています。見出しを一

部紹介します。「兵器ローン残高5兆円を突破」「米製兵器維持費2兆7000億円」「官邸主導で攻撃兵器選定」などなど。また辺野古新基地建設では「県民抑え際限なき予算」として「当初、想定した総事業費は3500億円以上。（略）今後いくらかかるか、見通しさえ国民に明らかにしようとしなさい」と報じています。

どうぞ、東京新聞の「税を追う」で検索してみてください。憲法9条で守られてきた日本の平和。でもこのシリーズを読んで、戦争の準備が着々と進められているのではないかと怖くなりました。その平和を守るためには政府のいいなりになってはならないと思います。私たちの命がかかっています。

### 世界の先住権の常識で再考するアイヌ政策 講演：テッサ・モーリス＝スズキさん

オーストラリア国立大学名誉教授のテッサ・モーリス＝スズキさん（右写真）の講演が3月9日に教育文化会館でありました。180人の参加者にはアイヌ民族の方や研究者もいました。



アイヌ新法の法律案について、テッサさんは先住権に言及した文言は一切なく、それに相当する条文もない。世界の流れは先住民族の先住権の確立であり、拡充だ。政府はアイヌが求めている先祖を祀る権利や漁業権を行使する権利をはじめ、アイヌ自らが求める先住権に最大限配慮した法律を制定すべきだと述べました。

先住民族が持つ権利とは、自己決定権、自治権のことであり、国連宣言には「自己決定の権利を有する。この権利に基づき、先住民族は、自らの政治的地位を自由に決定し、ならびにその経済的、社会的および文化的発展を自由に追求する」としています。

今回の法律案は、政府主導の観光政策でありアイヌの自立と尊厳を促さないと話しました。当事者の意見をできるだけ反映すべきだと思いました。

またアイヌの遺骨は元のコタンに返すべきだというのは同感です。

シドニーオリンピックで先住民の権利を謳ったシーンが映像で紹介されて、一番心に響きました。

「公正でなければならない

この土地は彼ら彼女らのものなのだ

それを返そう」

オーストラリアでは、小中学生が先住民族の歴史や言葉を学んでいるとのこと。日本は教育でも遅れていると思いました。

## 清末愛砂さんが語る「ベアテさんが憲法24条にこめた思い」

2月24日に藤原智子監督の追悼上映で、男女平等を求めて奮闘した女性たちの物語「ベアテの贈りもの」とホロコーストで犠牲になった親族らを追う「シロタ家の20世紀」が上映されました。憲法24条の草案を書いたベアテ・シロタ・ゴードンさんの思いを伝えました。2回づつの上映に570人が観ていただきました。

「ベアテの贈りもの」は2004年の制作です。当時、男女平等を求めて奮闘する女性たちが輝いていましたが、女性議員が増えなかったり、社会での不平等など当時より逆行しているのが残念です。

「シロタ家の20世紀」ではシロター族の受難の歴史が語られ、ベアテさんが日本の戦後の再建と未来のために情熱を注いだのは一族の祈りが背中を押したことがとてもよく理解できました。

室蘭工業大学准教授の清末愛砂さんが講演。ベアテさんが草案を書いた24条の素晴らしさについて語りました。

強調されたのは人権がいかに大切かです。憲法9条だけでは達成できない平和主義として、24条には「家庭生活における個人の尊厳と両性の本質的平等」が謳われています。

ベアテさんが起草した人権条項に共通するのは、「社会的に周縁化され、迫害されてきた人の保護と権利保障」という考え方でした。父のシロタさんは有名な演奏家でしたが、ユダヤ系であったために迫害を恐れて欧州から来日。ベアテさんは日本女性が「家長制度」の中で苦しむ姿に心を寄せていたことがわかります。

24条の役割を ■暴力に依拠しない人間を育てる場 ■軍国主義や愛国心を強制しようとする国家に従順に従わない人間を育てる場 ■強権的な政府を生まない努力をする人間を育てる場

■強権的な政府が誕生してしまったときに抵抗できる人間を育てる場と語りました。だからこそ、24条は、憲法前文の平和的生存権とともにあることが大切であると述べました。

私が東京の全日本民医連会館でベアテさんからお話を聞いたのは2000年の12月でした。

5歳から15歳まで東京で暮らしたベアテさんはお手伝いさんを通じて、「子どもが子守りに出されたり、農村が飢饉の年には娘の身売りが頻発したこと、『家』制度による女性の苦しみを教えられた」と語り、家族の中で、女性・子どもの権利が保障されることは、日本の女性たちの切実な願いだと受け止めたことと強調されました。「女性が幸せにならなければ男性も幸せに



講演する清末愛砂さん



2002年来札されたベアテさんと私

なれない」と痛切に感じていたのです。

長い間、ベアテさんが憲法草案に関わったことはシークレットで、50年がたって自伝「1945年のクリスマス」（1995年初版）で明らかにしたのでした。

今回の上映会の実行委員になったおかげで懐かしい著書とベアテさんとの思い出の写真も紹介することができました。

ベアテさんに「銀河通信」を差し上げたら「あなたにとって大事なことを続けてください」とサインしていただいたのも嬉しい思い出です。9条の陰に隠れがちですが、24条は9条と共に、平和的生存権を具体化する役割を担っています。改悪されないように頑張りましょう。

## 日本中の原発にさよならしよう



3.9 『原発いらない』と札幌市内を行進する市民

福島原発事故から8年。3月9日「さようなら原発北海道集会」には600人が集まりました。雪解けが一気に進み。歩きやすくなった札幌市内を「原発いらない」とコールしながら行進しました。

集会では小野有五さん（北大名誉教授）が講演しました。

泊原発敷地内の断層をめぐる、原子力規制委員会は2月22日の審査会合で、「活断層の可能性を否定できない」との見解を示しました。

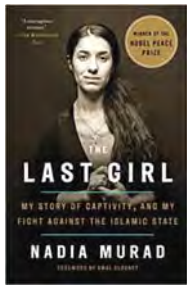
小野さんらの「行動する市民科学者の会・北海道」が独自に調査を続け、活断層の可能性を指摘、規制委員会に申し入れてきたことがついに認められました。また想定外の深さで起きた胆振東部地震は泊原発のさらなる危険性を教えてくれました。

危険な泊原発は廃炉にしましょうと結びました。

## 「青いケシの世界」写真展にお出かけください

ヒマラヤの青いケシを見たことがありますか？この花が札幌市の中央区で、50種類以上の花が咲きます。植物写真家で自然保護活動で一緒に活動した梅沢俊さんの写真も多数展示されます。是非お出かけください。4月23日（火）～28日（日）10:00～18:00（最終日16:00）コンチネンタルギャラリー（札幌市中央区南1条西11丁目コンチネンタルビル地下1階）

# Books



## THE LAST GIRL

ナディア・ムラド、ジェナ・クラ  
ジェスキ著 序文アマル・クルー  
ニー 吉井智津訳 東洋館出版  
社 1944円

ナディア・ムラドは1993年、イラク北部のコーチョという小さな村で生まれ育ちました。その村で暮らしているのは、少数民族であるヤズィディ教徒200家族でした。ヤズィディ教は古代から口承で伝えられ、文字を持たないため、蔑視され、長い間迫害を受けてきました。過激派組織ISの罪を、ナディアが鋭い感性で克明に記憶、記録したのが本書です。

ISは2014年6月、コーチョを占領し、多くの人々を虐殺。少年は洗脳して戦闘員にするために残し、若い女性を奴隷市場で売りました。

当時21歳のナディアは、この日、家族を殺され、故郷から連れ去られました。そしてともに連れ去られた姉や姪とも引き離され、人としての尊厳を奪われる生活を強いられました。ナディアを最初に買ったのは判事でした。最初、痛みを感じた性暴力も虐待も「私たちの魂を処刑するひとつひとつの処刑だった」と告発します。「囚われの身になったとき、あまりの孤独にもう自分が人間であるという感覚さえ失いかけていた。私のなかでなにかが死んでしまったのだ。『絶望は、死に近い』」と書きました。

読みながら、あまりのリアルさに、ナディアの怒り、悲しみが、わがことのように思えて、悔しさで胸が張り裂けそうでした。

決死の覚悟で、ナディアはISから脱出します。自らの意思で塀を乗り越え、助けを求めたのです。性被害を受けた女性を命がけで助ける人々がいるという光も伝えています。

ナディアの強く気高く生きる美しさに感銘を受けました。虐殺を生き延びた僅かなヤズィディ教徒たちは、雨が降れば床が水浸しになる難民キャンプで肩を寄せ合って暮らしています。

ナディアを最後にするために私に何ができるのか。「暴力は許さない」と声をあげて行動しなければと思いました。

ナディアは「戦争および紛争下において、武器としての性暴力を根絶するために尽力したこと」により、2018年にノーベル平和賞を受賞しました。授賞式で彼女が述べた言葉を紹介します。「私はさらなる同情を求めている。行動に変えることを求めている。正義がなされなければ、悲劇が繰り返される。正義こそが平和を得る唯一の手段だ」。



## 空をゆく巨人

川内有緒著 集英社 1836円

著者の川内有緒さんが本書の主人公の一人、志賀忠重さんに取材で初めて会った際、

心をつかまれた言葉が「一步を踏み出したならそれが冒険なんでねえの？」でした。

福島県いわき市の会社経営者の志賀さんと中国福建省出身の現代美術家・蔡國強さん。国も育った環境も違うふたりがいわきで出会い、築いてきた友情、そこから生まれたいくつかの「美術作品」を追った30年以上にわたる軌跡を描きます。

二人の出会いは偶然でした。美術に関心があったわけではないのに、日本ではまだ無名の蔡さんの作品を多数買ったことから、志賀さんが友人たちと「いわきチーム」を作り、作品への協力が始まるのです。

砂浜に埋もれた木造廃船を掘り出した作品や、海に導火線を置いて走らせた炎の作品など、蔡さんのスケッチを、志賀さんら「いわきチーム」の人々が形にしていきました。彼らはほとんど無償で、蔡さんの数多くの作品制作に協力してきました。蔡さんが有名だからではありません。いまどき、夢を実現するために労力を惜しまず、それを自腹で楽しむ気持ちがステキで、一気に読みました。

志賀さんが東日本大震災の2年後に手がけたのが「いわき回廊美術館」です。いわきの里山の一角につくられた、長さ160メートルの木造の長い回廊をギャラリーにした美術館です。美術館周辺の山々には、9万9000本もの桜の木を植樹する「いわき万本桜プロジェクト」を進めています。蔡さんもデザインで協力しています。志賀さんは福島に原発という「負の遺産」を残したことを激しく悔いて、未来のいわきを世界に誇れる場所にしたいと実行しました。やることがすべて壮大で、こんな自由な発想で生きている人たちがいることに勇気づけられました。

せちがらい世の中で、世界を自由に行き来する「空をゆく巨人」が、夢を実現させていくのが痛快です。

著者の川内さんは「度重なる災害。深刻化する貧困や格差。人々はかつてない分断のなかで生きている。そんないまだからこそ、常識や限界という境界線を越えてのびのびと生きる2人の『巨人』の姿、アートや文化の底力を伝えたい」とインタビューに答えています。

第16回開高健ノンフィクション賞を受賞しました。



## 右派はなぜ家族に介入したがるのか 憲法24条と9条

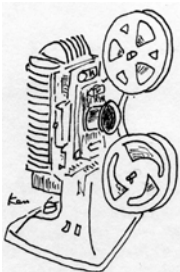
中里見博・能川元一・打越さく良、立石直子、笹沼弘志・清末愛砂一（著）  
大槻書店 1728円

本書は哲学、憲法、民法の研究者と弁護士が、「家族」を統制しようとする右派の狙いを読み解き、24条と9条を柱とする「非暴力平和主義」を対置します。

安倍政権や右派勢力は「親学」や家庭教育への介入など、家族そのものに国家的介入をはかり、日本社会で社会問題となっている貧困や格差を家族の責任だとしています。

戦争をする国づくりと絡めながら、国家主義的に人びとを統制するうえで家族に介入してきています。両性の本質的平等と個人の尊厳を掲げているのが24条です。24条が平和主義を構成するという考えかたをあまりして来なかったように思います。

先日、清末愛砂さんのお話を聞いて、平和を守るためには24条も大事なことがよく理解できました。自民党改憲案は「国と郷土を守るために」家族が仲良く暮らすことを要求しています。空気のように感じてきた9条と24条に守られてきたことに改めて気づき、伝える努力が必要だと思いました。



## バジュランギおじさんと、小さな迷子 カビール・カーン監督



インド映画といえば、群衆によるダイナミックな踊りと歌ですね。もちろん今作もたっぷりとありましたが、ヒンズー教とイスラム教、インドとパキスタンの対立を描きながら、二人の行動を通して和解させる力を秘めた物語でした。

スイスの山を想像させるようなパキスタンのカシミールの素晴らしい風景から始まりました。6歳の少女シャヒーダーは、耳は聞こえるのですが話すことができません。心配したお母さんと少女の二人でインドに願掛けに出かけます。しかし少女は列車から一人で降りて母と離れ離れになります。助けたのが底抜けに正直者で、お人よしの青年パワンです。彼はヒンズー教ハヌマーン神の信者です。声を発することができない少女ですが、身振り手振り、一枚の絵をみて、「ここ」と指さすのです。パキスタンから来たとわかり、パスポートなしの命がけの旅が始まります。

旅を彩るのが大自然です。インドから越境後に2人が夕陽を背に砂漠を歩くシーンと音楽が一番印象に残りました。

パワンは「なんとか親元に送り届けたい」との思いだけでした。ようやくパキスタンに入ったと

思ったら、スパイ容疑で警察に捕らえられます。どんなときにも嘘を言わないパワンに、味方が現れるのです。パキスタンのジャーナリストや、イスラム教徒のお坊さん等々。こんなことしてたら、パキスタンで殺されてしまうと思いながら、パワンの人柄の良さに惹かれていく人々。

少女の無邪気さと、愛らしさに心が洗われました。ラストは是非観てください。泣けて泣けて。でも嬉し涙です。

パワンを演じプロデューサーも務めたサルマン・カーンの代表作になると思いました。

ハルシャーリーが眼と表情だけで表現した少女の喜怒哀楽は演技を超えていました。

## グリーンブック ピーター・ファレリー監督

本作は、人種差別が残る1962年のアメリカ南部でコンサートツアーを行った黒人ピアノリストのドクター・シ



ャーリー（マハーシャラ・アリ）と、用心棒兼運転手として雇われたイタリア系のトニー（ヴィゴ・モーテンセン）が友情を育むさまを描いたロードムービー。黒人用旅行ガイド「グリーン・ブック」（黒人を排斥しないガソリンスタンドや宿などが記載されている）を頼りに旅する正反対の二人が心を通わせていくさまを、笑い涙、そしてジャズの音色と共に描きました。

トニーは黒人には差別意識を持っていましたが、シャーリーの演奏を聞いて度肝を抜かれます。妻への手紙に「あいつは天才だ！」と書くのでした。白人からは黒人だと、影であざ笑われる一方で、黒人たちからは、金持ちの白人にへつらうヤツと思われていることを知っている彼は、「自分は黒人でもなく白人でもなく男でもないとしたら、私は一体何者なんだ？」と苦しい心を吐露するのです。

黒人の控室は物置でした。トイレも白人とは別の粗末な掘立小屋。シャーリーが一人で入った白人用のバーで、袋叩きにあい、トニーが助け、シャーリーを理解するようになります。黒人は夜に出歩いてはいけないという法律で警察に捕らえられた上に収監もされます。ケンタッキーではトニーがフライドチキンをシャーリーに勧めるシーンが愉快。上品なシャーリーは最初は遠慮しますが、かぶりついて「うまい！」と驚くさまが笑えます。シャーリーはクラシックで生きたかったのにトニーにジャズの素晴らしさを逆に教えられます。トニーが書く妻への手紙はシャーリーの豊かな文才で素敵なラブレターに変身。妻を喜ばせます。

シャーリーが黒人の集まるパブでショパンのエチュード第11番「木枯らし」を弾く感

動的な場面がありました。ショパンの練習曲のなかでも難易度最上級といわれる作品で、鍵盤に叩きつけられるのは、美しさよりも嘆きや怒りでした。そこで、万雷の拍手を受けます。シャーリーは初めて黒人を理解したのかもしれませんが。音楽にさほど詳しくない私は、帰宅してから気になって調べたのでした。

大吹雪の中、たどりついたトニーの家でのクリスマスはいつまでも心に残りました。

人は話し合うことで理解を深めることが出来るんだというメッセージがいっぱい詰まった映画でした。トニーとシャーリーは生涯、親友だったという実話も素敵ですね。

アメリカではトランプ大統領の移民排斥発言によって、国内の分断が深刻です。どの人も尊厳を持った人間です。差別や偏見の意味を問いかけ、多くの人に見てもらいたい映画です。アカデミー賞の作品、脚本、助演男優賞を受賞しました。

共犯者たち

チェ・スンホ監督



イ・ミョンバク、パク・クネ両政権の約9年間にわたる言論弾圧の実態を告発した韓国のドキュメンタリー。

監督は、韓国の公営放送局MBCのジャーナリストだったチェ・スンホ。2012年にMBCを不当解雇された彼は、同じく放送局を解雇された記者たちと市民の出資で運営する「ニュース打破」を立ち上げ報道を開始し、できた作品です。

2017年8月に公開された本作は、韓国で26万人動員というドキュメンタリーとして異例の大反響を呼びました。

降板されることになったニュースキャスターのコメント「この1年、私の原則は自由、民主、権力の牽制、弱者への配慮。これでコメントをクロージングします」と締めくくったのが印象的でした。政府に占領され広報機関と化した放送局は、セウォル号沈没を全員救助と伝え、市民から大きな非難を浴びました。パク・クネ大統領が友人を国政に関与させていたことも明らかになります。

解雇された記者が「記者が質問しなければ国は亡びる」と発言。権力に果敢に立ち向かい今も真実を伝え続けていることに感動しました。

日本も言論弾圧は進行しているのではないのでしょうか？日本のマスコミ（特に某放送）も危ないなと考えさせられました。首相官邸が特定記者を排除する申し入れをしました。「国民の知る権利」「言論の自由」への弾圧であり、許せない行為です。民主主義を守るために見過ごしてはならないと思います。標的にされたのは東京新聞の望月衣塑子記者です。望月記者は、安倍政権の問題点をチェックする質問を一貫して続けてきました。このため官邸側は、質問を途中で遮ったり、東京新聞に注意文書を送ったりしてきました。私は望月記者の質問に、いつも胸のすく思いをしてきました。政府が嫌がるのは、痛いところを突かれているからだと思います。

韓国映画がすごいと思うのは軍事政権下にあっ

ても、民主化を実現するために大きな犠牲を払いながら闘い続けてきたことです。「弁護士」「タクシ運転手」「1987、ある闘いの真実」などの力作が続く韓国映画にいつも勇気づけられてきました。日本もこんな骨太の映画制作をして欲しいと思いました。

洗骨

照屋年之脚本・監督（ガレッジセール・ゴリ）



洗骨とは、死んだ家族の遺体が白骨になるまで待ち、改めて家族みんなで骨を洗い墓に納める風習です。舞台は沖縄の粟国島（あくにしま）。

妻を亡くして酒浸りの父のところに家族とうまくいってない長男、未婚でおなかの大きい長女が帰省します。バラバラな家族が母の洗骨を通じて再生する物語を美しい自然と笑いで包んで描きます。

神聖な洗骨の場面は、ショッキングでもありましたが、情けないおとうが妻の死を受け入れる大切なシーンでした。

家族は骨を丁寧に取り出して、水で一つ一つ洗い清めてゆく行為を通して祖先から受け継がれた命のつながりを感じていきます。死を受けとめることは、命を尊ぶことなんだなあとしみじみ思いました。長男が「骨を洗うことは自分を洗うことだ」と言った言葉も印象に残りました。

そして長女が急に産気づいて、家族が力を合わせて無事に生まれるのを見届けるシーンに、私自身のお産を思い出して涙が止まりませんでした。母の死は孫の命に繋がり、心があたたかくなりました。

今回は奥田英二が頼りないおとうを自然に演じておりこれまでのイメージが変わりました。登場人物がそれぞれに個性的。家族愛と命の尊さをたっぷり感じさせてくれました。エンドロールで古謝美佐子の『童神』が流れます。歌声と歌詞が心に響いて、また涙。私は早くに亡くなった友人たちを思い出していました。



ねことじいちゃん

岩合光昭監督

愛知県佐久島で敢行された撮影には、35匹以上の猫たちが結集。離島の人々と猫をめぐる心温まる物語。

妻を亡くした大吉じいちゃん（志の輔）は、飼い猫タマ

や友人たちに囲まれ、のんびりとした毎日を過ごしている。しかし、体の不調など穏やかな生活に少しずつ変化が訪れます。美しい海に囲まれた島は、日常が優しく温もりがあって猫たちにも優しくておおらかで、こんな島に住めたら猫も人も幸せだと思えました。猫が居心地がよ

ファースト・マン

デイミアン・チャゼル監督



「これはひとり人間にとっては小さな一歩だが、人類にとっては偉大な飛躍である」という名言を残した、アポロ11号の船長アームストロ

ング。ジェームズ・R・ハンセン著「ファースト・マン ニール・アームストロングの人生」を基に、当時の宇宙飛行士やNASA職員たちの奮闘、そして人命を犠牲にしてまで行う月面着陸計画の意義に葛藤しながらも、世紀のプロジェクトに挑んだアームストロング（ライアン・ゴズリング）の姿が描かれます。

歴史的な偉業の背後に、犠牲になった尊い同僚、病気で亡くした幼い娘への思いを描き、国家的ミッションに挑むアームストロングと家族の個人的な体験を通して、チャゼル監督は史実として認識されている壮大な出来事を、等身大の体験として観る者に実感させてゆくのです。

数々の苦難を越えて月面に着陸したアームストロングは、果てしない闇の中、ぼうっと浮かぶ月に立っています。ひとり月面を探索し、着陸船から60m東にあるイースト・クレーターにたどり着きました。そこに、幼くして亡くしたカレンの形見であるプレスレットを残しました。何も言わないけれど、アームストロングがどれほどカレンを思い、一日たりとも忘れていなかったことが伝わり、シーンとしました。

「ラ・ラ・ランド」でも息の合ったチャゼル監督とライアン・ゴズリングでしたが「ファースト・マン」によってふたりの才能に再び目を見張りました。

最新鋭のIMAXとアナログな16ミリを使い分けた映像も素晴らしかったです。

アームストロングの息子たちに対する細やかな制作者の取材が、観客にリアルに伝わってくる映画でした。

バハールの涙

エバ・ユッソン監督・脚本



クルド人の弁護士バハールは、夫と息子と幸せに暮らしていました。2014年にISに襲撃され、夫と父を殺され、息子はISの少年軍事訓練所に入れられます。バハールは監禁され性奴隷にされます。クルド人自治区に助けを求め、命がけの脱出をします。その脱出するまでの過去と、ISと闘うバハールの現在の物語が交互に描かれます。クルド人自治区でISと対峙する女たちだけの部隊をフランス人の女性戦場ジャーナリスト、マチルドの目から描いていきます。マチルド自身も同業の夫を亡くし、まだ幼い娘をフランスに残して取材を続けているのです。

部隊は「太陽の女たち」（原題）です。目を背けられない紛争の光景が、エバ・ユッソン監

督の綿密な取材によって描かれます。映画は内省的で、ISの罪を告発します。

母としての「絶対に息子を取り戻す」という信念と勇気に、私はこんな時、「闘えるのか？」と問いかけられたように思いました。大きな目が、悲しみを帯びながら意志の強さを感じさせて、ゴルシフテ・ファラハニが大切なもののために信念をもって戦う女性を体当たりで演じたのも印象的でした。残酷な場面はありません。抵抗する女性達は、苦しみの中に希望が育っていく姿をしっかりと伝えてくれました。

自然の豊かさや大切さを「銀河通信」の発行を通して考えてきたことを語ります

レイチェル・カーソン生誕112年「講演と音楽の集い」

◇日時：2019年 5月23日(木) 14:00~20:30

◇会場：北海道大学・遠友学会(札幌市北区北18条西7)

◇記念ハーブ演奏：14:15~15:00

「センス・オブ・ワンダー(※1)」などの美しいことばをハーブの音色にのせて演奏：若菜 直美 氏

◇記念講演第1部：15:00~17:00

「レイチェル・カーソンの精神と銀河通信」

講師：樋口 みな子さん

「放射能測定マップ」

講師：富塚 とみ子さん(はか一るさっぽろ)

◇記念講演第2部：18:00~20:30

「生きる覚悟」と「希望の光」~原発事故で自主避難して少女だった私が感じたこと~

講師：安達 和叶さん

私たちレイチェル・カーソン北海道の会は、とりわけ未来をなう子どもたちに、自然の不思議さ、自然の感性(センス・オブ・ワンダー)が育まれるように、多くの市民と共に環境問題を知り・考えるための活動を行っています。生誕111年、「沈黙の春」出版から55年の「この春」、レイチェル・カーソンが私たちに残してくれたもの、伝えたいこと、今を生きるヒントは、ますます重要になってきました。どうぞお気軽にご参加ください。

プログラム

14:00~14:15 開会の挨拶 沼田 勇美(共同代表)

14:15~15:00 若菜 直美 氏のハーブ演奏と歌の集い

15:00~17:00 記念講演 第1部 樋口 みな子さん、富塚 とみ子さん

17:00~18:00 「レイチェル・カーソンの夢んだ道」パネル展示と説明ならびに懇談

18:00~20:30 記念講演 第2部 安達 和叶さん

20:30~20:40 閉会の挨拶 近藤 務(共同代表)

会場の案内図

地下鉄南北線・北18条駅下車

西に向かって徒歩8分

13:30 開場いたします

資料代:500円

事前申込み不要

主催：レイチェル・カーソン北海道の会

問合せ：沼田 ☎080-3265-4382 yumie624@hotmail.co.jp

レイチェル・カーソン北海道の会・HP: <http://gisjirou.blog.fc2.com>



至：札幌駅

1000円募金にご協力ください

印刷通信読者には印刷と送料を負担して頂いています。残りの30部は市民運動の仲間に感謝の気持ちで差し上げています。6月からまた送料が12円値上げします。お渡しする通信に1000円の募金にご協力ください。ささやかですが送料と印刷の足にしたいと思ひます。よろしくお祈ひします。

購読料と寄付をありがとうございます(敬称略)

1. 22~3. 18

菅野真知子 沼崎勝洋 川原勝利 芳賀孝郎・淳子 伊藤康弘 宮崎信恵 高橋明子 菅邦子 藤島美佐子 和田マサコ 中佐藤真理 小林千賀子 田村陽子 亀田法子 溝井留美 高橋備 さかい廣 喜多義憲 梅沢俊 石井たかこ

計55, 500円は印刷と送料に使わせていただきます。北嶋節子さん、水溜真由美さんからは著書を、高橋備さんからも切手も寄贈いただきました。合わせてありがとうございます。

郵便振替をご利用ください。「銀河通信」02740